

平成 29 年 度 (2017)

慶應義塾大学入学試験問題

商 学 部

数 学

- 注 意
1. 受験番号と氏名は、解答用紙 A（マークシート）と解答用紙 B のそれぞれ所定の欄に必ず記入すること。さらに、解答用紙 A（マークシート）の受験番号欄をマークすること。
 2. 解答は、必ず指定された解答用紙の所定の欄に記入ないしマークすること。解答欄外の余白および採点欄には一切記入してはならない。
 3. 解答用紙 A（マークシート）への記入に先立って、用紙上に記載された注意事項を必ず読むこと。
 4. 試験開始後、2 ページに記載された「解答するにあたっての注意」を読んだから解答すること。
 5. 問題用紙は下書きに用いてよろしい。
 6. この冊子の総ページ数は 8 ページである。なお、中に計算用紙（ページ番号なし）が折り込まれている。

試験開始の合図とともに全てのページが揃っているか確認してください。ページが抜けていたり重複するページがあったら直ちに監督者に申し出てください。

《指示があるまで開かないこと》

《 解答するにあたっての注意 》

1. 問題Ⅱ（Ⅲ），Ⅱ（Ⅳ），およびⅢ（Ⅲ）の解答は解答用紙 B の所定の位置に記入し，それ以外の問題の解答は解答用紙 A（マークシート）にマークしなさい。
2. 解答が分数の場合は，分母が正の既約分数で解答しなさい。また，解答が根号を含む場合は，根号の中はできる限り簡単な形にしなさい。
3. マークシートにある $\ominus$ はマイナス符号 $-$ を意味する。マークシートの記入にあたっては，次の例を参考にしなさい。

[例 1]

(11)	(12)
------	------

 と表示のある問いに対して，「34」と解答する場合には，以下に示すように解答欄（11）の ③と解答欄（12）の ④にマークしなさい。

[例 2]

(13)	(14)	(15)
------	------	------

 と表示のある問いに対して，「 -56 」と解答する場合には，以下に示すように解答欄（13）の $\ominus$ ，解答欄（14）の ⑤，および解答欄（15）の ⑥にマークしなさい。

[例 3]

(16)	(17)
(18)	(19)

 と表示のある問いに対して，「 $-\frac{7}{89}$ 」と解答する場合には，以下に示すように解答欄（16）の $\ominus$ ，解答欄（17）の ⑦，解答欄（18）の ⑧，および解答欄（19）の ⑨にマークしなさい。

[例 1]

(11)	(12)
①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤
⑥	⑥
⑦	⑦
⑧	⑧
⑨	⑨
⑩	⑩
$\ominus$	$\ominus$

[例 2]

(13)	(14)	(15)
①	①	①
②	②	②
③	③	③
④	④	④
⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩
$\ominus$	$\ominus$	$\ominus$

[例 3]

(16)	(17)	(18)	(19)
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	⑨
⑩	⑩	⑩	⑩
$\ominus$	$\ominus$	$\ominus$	$\ominus$

I. 以下の問いに答えよ。

(i) $0 \leq x < 2\pi$ のとき、関数 $f(x) = 4\sqrt{3}\cos x - 4\sin x + 5$ は $x = \frac{\boxed{(1)} \mid \boxed{(2)}}{\boxed{(3)}}\pi$

で最大値 $\boxed{(4)} \mid \boxed{(5)}$ をとり、 $x = \frac{\boxed{(6)}}{\boxed{(7)}}\pi$ で最小値 $\boxed{(8)} \mid \boxed{(9)}$ をとる。

(ii) 以下のようにして数列 $\{a_n\}$ を定義する。 $a_1 = 1$ とする。 $n = 1, 2, 3, \dots$ に対し、曲線 $y = x^5$ 上の点 (a_n, a_n^5) における接線と x 軸との交点の x 座標を a_{n+1} とする。このとき、数列 $\{a_n\}$ の漸化式は

$$a_{n+1} = \frac{\boxed{(10)}}{\boxed{(11)}} a_n$$

である。数列 $\{a_n\}$ の隣接する2項の差 $a_n - a_{n+1}$ が $\frac{1}{1000}$ 以下である自然数 n の最小値は $\boxed{(12)} \mid \boxed{(13)}$ である。ただし、 $\log_{10} 2 = 0.3010$ とする。

- II. A社は工場 F_A で商品 P_A を製造している。商品 P_A の製造費用を表す変数は、製造量 x の関数であるとする。この関数を $c(x)$ で表す。以下の分析を容易にするため、 $c(x)$ は区間 $x \geq 0$ を定義域とする関数とし、 $c(0) = 0$ とする。また、正の実数 u に対して、関数 $c(x)$ の $x = u$ における微分係数が定まるとし、その値を $x = u$ における限界費用といい、 $m(u)$ で表す。さらに、 $a(x) = \frac{c(x)}{x}$ と定め、正の実数 u に対して、 $a(u)$ を $x = u$ における平均費用という。ここで、

$$m(x) = x^2 - 8x + 17 \quad \dots \textcircled{1}$$

であることがわかったとする。

- (i) 区間 $x > 0$ において、限界費用が最小となる製造量を x_m で表すと $x_m = \textcircled{(14)}$ であり、平均費用が最小となる製造量を x_a で表すと $x_a = \textcircled{(15)}$ である。

(ii) $\int_{x_m}^{x_a+1} |m(x) - a(x)| dx = \frac{\textcircled{(16)} \cdot \textcircled{(17)}}{\textcircled{(18)}}$ である。

- (iii) この問いでは、限界費用 $m(x)$ を特定する式①は仮定しないことにする。その場合でも、ある $\bar{x} > 0$ に対して、平均費用 $a(x)$ が区間 $0 < x \leq \bar{x}$ において単調に減少するならば、すなわち、 $0 < u < v \leq \bar{x}$ ならば $a(u) > a(v)$ となるならば、

$$x_1 + x_2 \leq \bar{x}, \quad x_1 > 0, \quad x_2 > 0$$

を満たす任意の x_1, x_2 に対して、

$$c(x_1 + x_2) < c(x_1) + c(x_2)$$

となることを証明せよ。(その証明は解答用紙Bの(ア)欄に記せ。)

- (iv) B社は工場 F_B で商品 P_A と同等な商品 P_B を製造している。商品 P_B の製造費用は、商品 P_A の製造費用と同じであるとする。すなわち、B社における商品 P_B の製造費用は、製造量 x の関数 $c(x)$ で定まる。

ここで、A社がB社を買収したとし、商品の製造はA社が工場 F_A ですべてまとめて行うこととする。(商品が同等なので、工場 F_A で製造した商品 P_A をB社の顧客に提供しても何ら問題はない。また、このとき、工場 F_B における製造量は0になる。) 買収前と比較して、製造を集約することによって両社合わせた製造費用が節約される度合いを求めてみよう。

買収時点での商品 P_A と商品 P_B の製造量を、それぞれ u_1 と u_2 ($u_1 > 0, u_2 > 0$)とする。このとき、節約される費用は、再び、限界費用 $m(x)$ に対して式①を仮定すると、

$$u_1 u_2 \left(\boxed{\quad (イ) \quad} \right)$$

となる。(もしこの値が負となる場合は、製造費用は節約ではなく追加されることになる。)

III. 点 O を原点とする座標空間に 2 つの平面 π_1 と π_2 がある。平面 π_1 の方程式は、 $x - 2y + 3z + 1 = 0$ であり、平面 π_2 の方程式は、 $3x + 4y - 7z - 5 = 0$ である。そして、平面 π_1 と π_2 の交線を ℓ とする。

- (i) ある点の原点 O を基準とする位置ベクトル $\vec{p}_0 = (1, \boxed{(19)}, \boxed{(20)})$ と、方向ベクトル $\vec{v} = (1, \boxed{(21)}, \boxed{(22)})$ を用いると、

$$\vec{p} = \vec{p}_0 + t\vec{v}$$

は直線 ℓ のベクトル方程式である。ここで、 $\vec{p}$ は直線 ℓ 上の点の原点 O を基準とする位置ベクトルで、 t は実数である。

- (ii) 点 $A(2, -8, 3)$ を中心とする球面 S を考える。球面 S と直線 ℓ が 1 点のみを共有するとき、その共有点の座標は $(\boxed{(23)}, \boxed{(24)}, \boxed{(25)})$ 、 $(\boxed{(26)}, \boxed{(27)})$ である。また、球面 S と直線 ℓ が異なる 2 点を共有し、その 2 つの共有点と点 A を頂点とする三角形の面積が $24\sqrt{35}$ であるとき、その 2 つの共有点の座標は、 $(\boxed{(28)}, \boxed{(29)}, \boxed{(30)}, \boxed{(31)}, \boxed{(32)})$ 、 $(\boxed{(33)}, \boxed{(34)}, \boxed{(35)})$ と $(\boxed{(36)}, \boxed{(37)}, \boxed{(38)}, \boxed{(39)})$ である。

- (iii) 直線 ℓ は x 軸に平行な平面 π_3 と y 軸に平行な平面 π_4 の交線でもある。このとき、平面 π_3 の方程式は

$$\boxed{(ウ)} = 0$$

であり、平面 π_4 の方程式は

$$\boxed{(エ)} = 0$$

である。(これらの方程式はできる限り簡単な形にせよ。)

- IV. 箱の中に赤玉5個、青玉4個、白玉3個が入っている。玉には1から5までの整数のいずれか1つが書かれており、赤玉には1, 2, 3, 4, 5の各数が1つずつ、青玉には1, 2, 3, 4の各数が1つずつ、白玉には1, 2, 3の各数が1つずつ書かれている。

この箱から太郎が玉を1個取り出し、その玉を箱に戻さず残りの玉から花子が1個取り出す。このとき、玉に書かれた数が同じならば、おのおのが自分を取り出した玉を獲得し、異なるならば、大きい数が書かれた玉を取り出した方が両方の玉を獲得するゲームを行う。

- (i) このゲームにおいて、太郎が1個の玉を獲得する確率は $\frac{(40)}{(41) \mid (42)}$ であり、花子が2個の玉を獲得する確率は $\frac{(43) \mid (44)}{(45) \mid (46)}$ である。そして、花子が2個の玉を獲得したとき、玉に書かれた数の差の絶対値が n である確率を p_n とすると、

$$\sum_{n=1}^4 np_n = \frac{(47) \mid (48) \mid (49)}{(50) \mid (51)}$$

である。

- (ii) このゲームにおいて、太郎が少なくとも1個の赤玉を獲得する確率は $\frac{(52) \mid (53)}{(54) \mid (55)}$ である。
- (iii) このゲームを2回繰り返すことを考える。1回目のゲームで獲得した玉を箱に戻さず、続けて2回目のゲームを行ったとき、太郎が2回とも同色の玉を取り出す確率は $\frac{(56) \mid (57)}{(58) \mid (59)}$ である。また、花子が2回のゲームを通じて獲得した玉に書かれた数の和が15となる確率は $\frac{(60)}{(61) \mid (62) \mid (63)}$ である。

《 以下余白 》